

※本作に収録されている作品すべてはフィクションであり、実在の人物・団体などは一切関係がありません。

また、作中で行われている行為を現実で行うと不利益を被る可能性があります。

十八歳未満の方による本作の購入・閲覧・所持を禁じます。また、十八歳未満の方に本作を販売・貸与・譲渡するまたはその他の方法で閲覧させることも禁止します。

本作品を閲覧した結果、何らかの不利益を生じたとしても作者は一切の責任を負いかねます。

本作の全てまたは一部、あるいはそれを加工・翻訳したものを無断で販売・複製・複写・転載・アップロードすることを禁じます。

二人のメイドに愛されまくる彼の一日の一部始終

作：嗟峨野勝馬
イラスト：紗倉シホ

その屋敷は、郊外の一等地にどっかりと建っていた。

大富豪の両親から譲り受けた広大な屋敷。一人で管理するにはとても手が行き届かない。だから、彼はメイドサービスを利用することにした。

インターネットで見つけたサイトを利用して、二人のメイドの派遣を依頼する。部屋はたくさんあるし、住み込みでも問題はないだろう。そんな風に軽く考えていた。

まさか、それがこんなことになるなんて――

「おはようございます、ご主人さま♪」

「よく眠れましたか、ご主人さま？」

「あ、お、おふぁよ……」

起きた途端にメイドが二人。後ろから抱きしめながら両方の乳首に手を這わせているのがハリア。豊満な胸の感覚が背中越しに伝わってくる。正面からズボンを脱がせて、綺麗な手袋を嵌めた手で彼の股間を優しく握っているのがユキア。

「おはようございます♪今日もご主人さまだったらとても可愛らしいですわ♪」

「ああ、ご主人さまの呆けたようなその表情、素敵♪もつと見せてくださいませ、ご主人さま♪」

二人のメイドになぜかとても気に入られてしまった彼は、毎日毎日たつぷりと「可愛がられ」てしまふようになったのだ。

ほどよい暖かさに包まれた部屋の中で、寝起きの弛緩した体を前後から優しくメイドたちに抱きしめられる快感。両胸に這ったハリアの両手がさらりと動く。

「ほおら、ご主人さま♪大好きな乳首ですよ♪いっぱいコリコリしましょうね♪」

「あひゃつ、あはぁっ……」

「あらあら、声が出ちやつてますよ、ご主人さま♪とっても可愛い声が♪」

ハリアが人差し指と親指で彼の両乳首をつまみ、こりこりと撫でまわす。もともとそんなに感じる方ではなかったのだが、二人のメイドによってすっかり乳首は性感帯に開発されてしまった。甘くじれつたい刺激が彼の両胸を襲う。

「ちよつと、やめえつ……」

「ああ♪もだえちやう♪主人さま、可愛い♪」

「らめつ、らめつたらあつ……」

「ご主人さま、そんなに動かないでえ♪素直になつて気持ちイイところいっぱい楽しみましょうよ♪」

じたばたと動いてなんとか拘束から逃れようとするが、後ろからしっかりとホールドされてしまつてそのままなすすべなく、乳首をまさぐられる。



「いっぱい気持ちよくして差し上げますから、どうぞ楽になさってくださいね」
「あひやああつ！」

そこにもう一人のメイドが乱入する。

「ハリア、だめですよ、乳首ばかり気持ちよくしても、男の人はもどかしくなるだけです、ほおら、こつちも気持ちよくして差し上げないとね」

ハリアの乳首責めによつてたつぷりと焦らされ、屹立してしまつた男性器を、今度はユキアが優しく撫でる。さらさらとした触感の手袋で亀頭を撫でまわされると、いつそうドクドクと脈動した。

「あひやああああああああつ！！！！」

「ご主人さまのおち○ぽミルク、今日もたつぷり溜まつてそうですね、反応はこんなに初心で可愛いのに、こつちの方は随分立派、そんなところも素敵ですよ、ご主人さま」

「溜まつたミルクの処理もメイドの大事なお仕事ですので、どうぞ私たちにすべて任せてくださいね、ご主人さま」

二人のメイドはそんなことを言いながら、彼の敏感な性感帯を優しく刺激する。

「あひやああああつ！！！！一人とおおおつ！！！！それらめえええええつ！！！！！！！！」

「ああくん、ご主人さまのその顔、可愛すぎます、大好きですよ、ご主人さまあ」

「私もご主人さまのことだ、いい好き、だからいっぱい気持ちよくして差し上げちゃいます」

「ほおら、おち○ぽミルクがいっぱい上がってきますね、ご主人さまあ」

「このままおもしろしちやったらきつとおつても気持ちイイですよ、ご主人さま」

後ろからの責めは乳首だけでなく、お腹や首の下まで、荒野を駆け巡るかのように縦横無尽に二本の腕が走り回る。前からは竿だけでなく、玉や蟻の門渡りまで、高価な工芸品を磨き上げるかのように撫でまわす。

当然のことながら、そんな責めに耐えられる男などこの世にいはずもない。

「やばい！！！！もう出ちやうううううううううう！！！！！！！！」

己の絶頂の予感を感じ情けない叫び声をあげてしまうが、二人のメイドはそれをすべて包み込む。

「いいんですよ、ご主人さま、ご主人さまが気持ちよくなるのが私たちの幸せですから、もつと恥ずかしい声上げていいんですよ、ご主人さま、気持ちよくなって我慢できなくなつて情けない声あげちゃつてる、ご主人さまとつても素敵ですよ」

「そうですね、ご主人さま、ご主人さまがどんなに惨めに白いおしっこおもしろしちやつたつて決して嫌になつたりしません、だから私たちの前では全部さらけだしてください、ご主人さま、恥ずかしいことも情けないことも全部包み隠さず私たちにさらけ出してください」

「全部受け止めて差し上げますから、ご主人さま、さあ、さあ、今日もたまつたミルク、ぴゅーぴゅーしちやいましよ」

「おもしろしゅーぴゅーしちやう、ご主人さま、大好きですよ、だから、さあ遠慮なくおもしろして

美人デリヘル嬢コンビのマジ堕としゲーム

作：嵯峨野勝馬
イラスト：右の人みつる

「ついに呼んじやった……」

徒田 真斗流(かちた まとる)はほうと小さく息を吐きながら、手元の十万円とスマホを交互に眺め見た。ここはラブホの一室。扇情的なピンクの証明がてらと部屋の中を照らしている。童貞の彼にとっては初めてのラブホで入るだけでも一苦労だったのだが、今やそれ以上のことを成し遂げた達成感に包まれていた。

デリヘル。女性を派遣してもらい性的なサービスを受けることができるお店。彼は初めてデリヘルに電話し、女性スタッフを派遣してもらおう注文をしたのだ。しかも——一気に二人も。夢の3Pである。

社会人になって初めてのボーナスももらい、これまで性的な経験もなく鬱屈とした思いを抱きつつ、ほかに趣味も取り立ててないような真斗流にとっては、一度風俗で遊んでみるかというのは、決して突拍子もない思いつきではなかった。

いきなりソープもと考えたのだが敷居が高く、まずはデリヘルということを入念に調査をし、相応の値段の代わりに当たりはずれの少なそうなところを選ぶことにした。

二人を呼んだのは、最悪片方外れても二人とも外れることはないだろう……というような保険の意味も込めてのことである。チェンジという言葉としては聞いていたが、初めての風俗でちゃんとできるとは思わなかったので安全策を取った。

そしてあとは彼女たちが来るのを待つだけである。真斗流はどきどきしながらその時を待っていた。

* * *

「あたしがめんたんぞ」

「わたしがぴいちゅんだよ、よろしくね！」

「よ、よろしくお願いします！」

果たして。真斗流の待つ部屋にやってきたデリヘル嬢は二人が二人とも、真斗流の思っていた以上に可愛く美しかった。

鮮やかな金髪に髪を染め小麦色の肌を惜しみなくさらすめんたん、長く黒い髪をすらりと伸ばすどこか上品な雰囲気のあるぴいちゅん……

(ま、まさかこんなに可愛い人たちと今からエッチなことができるなんて……)

胸の鼓動は否が応にも高まり、頬は赤く染まる。二人の方に視線を送るのも恥ずかしいという極度の緊張ぶりである。そんな真斗流をめんりいは優しく誘った。

「お金も払ってもらったことだし、まずはシャワー行きましょうね♪」

「は……」

心ここにあらずといったいで向かったシャワーで、さっそく真斗流はこれまで味わったことのないような快感を教えられた。



「ほおら気持ちいいかなあ〜」

「前も後ろもいっぱい洗っちゃおうねえ〜」

前後から体中を泡立たせた二人に抱き着かれ、すりすりとお泡を広げられる。いきなりの濃厚サービスにまるでどこかへ飛んでいってしまうような気がした。

「あひいっ！！それすごいですううっ！！」

「そっかさっかあ♪じゃあもつとエッチに洗ってあげる♡」

ぴいちゅんの両手が真斗流の脇の下を通ってによりりと伸びてくる。そのまま真斗流の胸にある二つの突起を優しくつまんだ。

「あれれ〜なんだか、こりこりしてるところがあるね〜これはしっかり洗ってあげないと♡」
「あひやあああつっつ！！！！！！」

獲物を取られたかぎ爪のように両の乳首を縦横無尽にコリコリと撫でまわす。まさか乳首がこんなに感じるものになるとは思ってもいなかった真斗流はその甘くねちっさい刺激にたちまちメロメロになってしまった。

しかしそこにさらにめんたんが追撃を加える。

「こっちもこれから使うんだから、いっぱいキレイキレイしてあげないとね〜♪」

飲み屋で逆ナンンされて……

作：嵯峨野勝馬
イラスト：倉田むと

「今年も何もなく過ぎてしまった……」

僕は独りで酒場のカウンターに座り、ちびちびとビールを飲んでた。童貞年数更新を間近に控えた年の瀬、カップルたちを横目に見ながら飲む酒はおいしくもなんともない。どうしてこうなつてしまったのか、可愛い彼女と楽しそうに話しているあの男と僕の違いは何なのか、などとあてもなくぼんやりと考える。実家では彼女できた？といつも聞かれ、二つ下の弟はヤリチン生活を堪能したあと、おしとやかで美しい奥さんをゲットしとても楽しそうに働いていることを思えば、今年の帰省は何かと理由をつけてやめてしまおうかという気分になつてしまふというものだ。

ああ！！暗い、暗い！！気分が暗い！！これが童貞ということか！！

ひとしきりそうやってわが身の不幸を嘆いていたら、いつの間にか隣に人が座つていた。

まず目に入ったのは白い手袋。上品そうなその手で、これまた上品そうなグラスに入った外国のお酒を優雅に飲んでいる、綺麗な女の人が隣に座つていた。僕より少し年上のお姉さんに見える。つい目が合つてしまうと、お姉さんにはつこりと僕に微笑みかける。思わず恥ずかしくなつて、僕は目をそらしてしまった。

「あらあら、どうしちゃつたのかなあ」

からかうようにお姉さんはそう言つと、僕の顔を強引にのぞき込んできた。ち、近い！！

「そ、そつちこそいきなり何か御用ですかっ！？」

上ずつた声が出てしまい、余計に恥ずかしくなる。その声を聞いてお姉さんはクスクスと笑つた。

「ふふつ、別に〜キミがちよつと寂しそうにしてあげたから、付き合つてあげようかと思つて〜」

「え、ぼ、僕は別にそんなつ……」

「本当かなあ？」

お姉さんはそう言つと、椅子をぐいと僕の方へ近づけてきた。肩と肩が触れ合うようなゼロ距離で、鼻の中にはなんだかい匂いもただよつてきて、僕の心臓はまるで超特急かのようにドキドキと鳴りだした。

「ねえ、ほつぺが真っ赤になつちやつてるよ？どうしちゃつたのかなあ？」

「そ、それは……」

僕が言い淀んでいると、お姉さんはさらに口を僕の耳元に近づけてきた。

「当てるあげよつか？お姉さん、キミのこと、わかつてきちやつた〜」

「な、何を……」

「ど・う・て・い・い・な・ん・で・し・ょっ」

「くっ！？」

いくら耳元だからって、こんな外のお店で、綺麗なお姉さんがそんな単語を言うなんて思いもよ
らなかった僕は、思わず変な声を出してしまった。それを見たお姉さんは満足そうな顔になっ
てる。

「ふふっ、アタリかなあ？ね、キシ、これから時間ある？よかつたらお姉さんと、とつてもイイコト
しない？」

そんなことを言われた僕は、断れるはずもなく、ふらふらとお姉さんに連れられて、童貞喪失
の期待を胸の内に高鳴らせながら、ラブホに入ってしまったのだった。

——で、今、

「ほらほら♡♡♡がいいんでしょお？」

白い手袋に包まれた綺麗な手のひらが、僕の陰茎を両側から挟み、上下に動かしてくる。すり
すりとした手袋の感触が両脇を撫でる一方で、裏筋を避けられてしまうために絶頂に至ること
はできない。

「いっっ、けどっ、イかせてっっ」



僕の口からは自分のものとは思えないような情けない声が断続的に漏れ続けていた。かれこれ30分。1時間？僕はずつとこうやって焦らされ続けていたのだ。

「だめだよぉ♡まだ夜は始まったばかりだもん♡イかせな♡い♡」

「ええっ、そんなぁ……」

童貞喪失の期待もどこへやら、今は延々と練り替えされる寸止め攻撃に対し、ただ射精を懇願するだけの存在になり果ててしまった。

両腕はしつかり縛られてしまっており、暴れてどうにかすることもできない。

「初めてのエッチで気持ちよすぎて暴れちゃったらよくないから。」

などと言われて素直に従ってしまったが、今思えば最初から仕組まれていたのだろう。

「ふふふっ、童貞クンってほんと単純だよねっ。餌に釣られてのこのことやってきちやうしさっ。で、私はそんな童貞クンを、こうやって寸止め焦らし責めするのが大好きなんだ。まともにセックスできると思っていたら、セックスどころか射精もさせてもらえずにもだえ苦しむ、性欲だけいっちょ前に大きくなっちゃった童貞クンのその顔だっ。いい好き。」

綺麗な顔からサディスティックにそんな言葉を紡ぎ出しながら、お姉さんは白手袋をはめたその手の位置を僕の亀頭に動かした。

「このあたり、カリとか、てっぺんとか、ぐりぐりっつて意地悪したら、どうなっちゃうかなあ。」

「あひいっ！それ、やめてええええっ！！」

普段は皮で守られているその敏感な部分を手袋に入った手で思いつきり撫でまわされて、僕はバタバタと必死にもがく。その様子をお姉さんは満足そうに見下しながら、亀頭を撫でる手の動きをさらに淫らに激しく変えた。

「ほおら、童貞クンの亀さん、よろしよっし。イイコ、イイコ。カリの方もしつかり可愛がつてあげないとねっ。この、ちよつと膨れる部分に、指で作った輪つか当ててっすりすりっ。すりすりっ。」

「あひやああああっ、イきたいいいいいっ！……イかせてええええっ！……」

「だめですっ。」

僕の涙ながらの懇願をお姉さんは楽しそうに蹴飛ばす。

「あゝあ、童貞クン可哀そおっ。いつもは自分でオナニーしてるから、きつとこまで気持ちよくなつたことないんだろっうねえ。シッココしててイきそうになつたらすぐ射精までしよ。ききつちゃうもんねえ。でも今日はだめえ。イきそうになつても、イきたくても、ぜつたいに射精できない気持ちよさがどんなものか、骨の髄まで味わわせてあげるっ。」

お姉さんはそう言いながら、着ていたシャツを脱ぎ出した。ブラジャーに覆われた刺激的なおっぱいが僕の目を奪う。

「ふふふ、ブラの外し方の練習もしたかったかな？ま、それはまた別の機会にやってね。」